

# イメージ画にみる他界の表象

— この世とあの世の位置関係 —

やまだ ようこ・加藤 義信<sup>1)</sup>

## What Kind of Images Do Japanese Youth Have on This World and the Next World?

— The Spatial Relationships between the Two Worlds Represented in Their Drawings —

YAMADA Yoko and KATO Yoshinobu

とし子はみんなが死ぬとなづける  
そのやりかたを歩いて行き  
それからさきどこへ行ったかわからない  
それはおれたちの空間の方向ではかられない  
感ぜられない方向を感じようとするときは  
だれだってみんなぐるぐるする

(宮澤賢治「青森挽歌」)

### 問 題

#### 1 はじめに — 心理的現実としての「あの世」

人は誰でも死ぬ。人は有限の存在である。「死」の表象をもったときから人は、死の向こうには何があるのか、死んだ後はどうなるのか、人間はどこからきてどこへ行くのか、さまざまに想像をめぐらせてきた。

人は想像力によって、この世の有限性を越えようとする存在である。ことばや表象によって、人は、自分が今見ている世界のほかに、見えないイメージの世界をかたちづくってきた。私たちは、今・ここという現前する世界の他に不可視の世界、ここを越える表象世界を二重化させた世界のなかで生きている。そのようなパラレル・ワールドに生きることが人間存在の根幹をなす特徴だとすれば、「この世」のほかに「あの世」という表象をもつことは、特異な神秘的現象どころか、ごく自然で普遍的な心理現象だといえよう。

長らく、心理学は、あの世とこの世の表象という重要な心理現象を無視してきた。近代合理主義に基づく自然科学的思考によれば、死後の世界など想定することさえおぞましく、それは野蛮で未熟で魔術的な心性の反映かオカルトの世界であり、まともな心理学の対象とはみなされなかつ

たからである。

しかし、心理的現実 (psychological reality) は、物理的現実や生物的現実とイコールではない。近代の合理的考えが浸透した現代においても、心理的現実としては、人は死によって消滅するという人生観や世界観だけで生きているわけではない。ほとんどの民族が、生物的な死によって人間の生を終わらせず、「靈魂」や「死後の世界」という観念や宗教を発達させてきた。現在でも、そのような世界観は民衆の習俗や素朴概念として根強く存続しているのではないだろうか。そこには、迷信も混入している。しかし、近代合理主義が排除してきた、目に見えない聖なるものや生命の大切さを恐れ敬う心も連動しているはずである。そのような敬虔な心のありようを明確にすることは、近代合理主義的な世界観の覆いをはがし、もう一度、「生と死の根元に立ち返る教育」を考えるために必要である。

また、生涯発達をとらえる視点の変革も必要である。生涯発達理論は、従来のように個人の生涯から死までで終わるのではなく、個人を越えるより大きな世代連関のライフ・サイクルを視野に入れ、人が死後にたくす願望の世界としての他界観念を組みこむ必要がある。そのためには、人が素朴にイメージする他界観念の実態をありのままに眺めていかねばならない。死後の世界を想定する人々を「非科学的」「魔術的」「間違っただ」「未熟な」思考の持ち主とみなす価値づけや、「科学的」な思考を広めようとする啓蒙的な方向からは自由になっておきたい。

## 2 イメージ画でアプローチする文化表象としての「あの世」

まず、何を問うか明確にしたい。ここで扱う「あの世」は、「死後の世界は存在するか」と問う超心理学の議論に加わることはない。また、「死後の世界を信じるか」と問う信念体系 (belief system) や宗教意識は、比較のためのみに使う。従来の信念体系や宗教意識についての質問紙調査には、個人が自覚できる範囲の知しか扱えないこと、「はい」「いいえ」という問答形式に縛られることなど限界が多々ある。ポラニー (Polanyi, M. 1966) が暗黙知ということばで述べているように、私たちは「語るができるより多くのことを知るができる」のが常であることを考えると、「語るができないイメージ」「本人にもよくわからない隠れた (implicit) 心の世界」を何らかの「形」にして掬いとっていく必要がある。そのための方法論として、知識よりも身体感覚や直感に根ざした表現を可能にし、全体をひとまとまりにした縮約表現と瞬時の情報伝達に優れたイメージ画を用いる (やまだ 1988)。

ここでのイメージ画の使用法は、投影法やイメージ画により心の深層を解釈し治療する臨床的アプローチとも異なる。「死後の世界を想定する人々はどのような特徴をもつのか」と問う個人差も中心主題ではない。時代による歴史的変遷も重要だが、直接には扱わない。ここでの主たる関心は、「個人の心理」の理解や変容ではなく、集合表象として「文化の心理」を理解しようとする方向に向かっている。

なぜ「文化の心理」なのか。それは心理学が今まで「個人の心理」中心にものを見ることが多すぎたのではないかという反省に基づいているからである。心理現象は個人の心の内に閉じて存在する静的なものではない。心理現象は文化的環境のなかに満ちており、私たちは日々、文化的環境の空気を呼吸し排泄しつつ生きている。その空気は身体内にも満ちているが、それは同時に外の環境にも満ちており、一瞬のちには、外のものが内に入れられ、内のものが外に出される。

空気がどちらに属するのか問うことができないように、ここで扱うイメージも心の内にあるとは限らない。北山忍(1997)がいうように、心と文化は非二元論的にとらえられるべきである。

ここでは「あの世」を文化表象として扱う。文化とは、Geertz(1973)を変形して次のように定義しておこう。「文化は、表象に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、表象的な形式に表現され伝承される意味体系を表している。」

あの世が実在するかどうかや、あの世を想定することが正しいかどうかは別にして、それぞれの文化が有史以来長い時間をかけて伝統的に育んできた「あの世」のイメージがある。それは、科学が発達し合理的思考が定着した現代でも心理的現実として人々の生活に生きていると考えられる。文化は生きた意味体系であり、イメージ・タンクである。そのなかで現に今生きている普通の人々のもつ集合表象としての「あの世」のイメージを明確にしたい。想像力の産物としての死後の世界に限定し、現代のごく普通の平凡な人々のなかに今も「隠れた形」(加藤他 1984)として生きている「基層文化」(塚本 1994)を「見える形」にしてみたいのである。

### 3 関係概念としての「この世」と「あの世」

本研究では、「あの世(他界)」単独のイメージではなく、「あの世」を「この世」と関係づけて関係概念として扱うことが大きな特徴である。あの世の表象は、この世の表象の何らかの反映であり、両者は分かちがたく結びついている。その関係性のなかで、あの世をとらえることが必要である。あの世は、この世の人々の想像力と関係性で成りたつ世界であり、あの世を必要とするのもこの世の人々であろう。

なお、ここで「他界」「来世」という学術用語よりも、「あの世」という日常語を使うのは、単に質問紙調査をする時に親しみやすいというだけではなく、それが日本文化に根づいた優れたことばだからである。どちらかという「他界」は空間概念であり、「来世」は時間概念である。しかし、心理的現実としては、空間と時間は分離されるものではなく合体して体験される。「あの世」は、ここの世界と区別された遠隔世界という空間概念と、ここの世界の次の世界という時間概念をともに含んでいる。「あの世」は、時空を含んだ場所概念であり、心理的現実をよく反映したことばである。

柳田國男は、他界という語を使わず、「あの世」ということばを好んだといわれる(坂本 1997)。「この」に対して「あの」は、佐久間鼎(1936)の提出したコソアドの体系のなかに位置づけられ、近さと遠さという「場所」を基底にした、より大きな日本語の認識体系のなかで構造化される。「来世」には「現世」という対応語があるが、「他界」は単独で用いられることが多く対応語がないことも問題である。また「他界」には、折口信夫(1952)のように、死後の世界の他に、他郷、異郷、異界の意味を含める場合があるが、「あの世」は、日常語でありながら「死後の世界」を明確に意味しており、範囲が限定され誤解を生じにくいと思われる。

### 4 他界観念の分類

Grégoire, F. (1956)によると、死後の世界という観念は埋葬形態からみると、旧石器時代後期の最古の人類からすでにみられ、先史以来、普遍的にみられる。ニューギニアやアフリカのブツ

シュマンなど諸民族の死後の世界は、あの世がこの世とよく似た世界であり、死者はあの世でこの世の生活と同じような生活を営み、同じような必要を感じ、同じような感情をもつと想定されている。彼は西欧キリスト教世界観をもっとも高度な文明と位置づけているので、これらの考えは原始的であり、「死者は墓に住むと同時に、死んだときにいた家の近くにも住み、またヨミの国にまだ着かないときにはそこに行く途上遠くにもいる（レヴィ＝ブリュールの引用）」という考えを混乱し矛盾にみちたものと紹介している。

Tylor (1871) は他界観念を、大きく二群にまとめている。靈魂輪廻 (transmigration) の思想と、来世 (future life) の観念である。前者には、再生 (reincarnation) と転生 (transmission to lower animals) が含まれる。ここで扱うのは、後者の来世の思想である。

彼は来世をその在処 (locality) によって5つに分けた。地上の他界、西方の他界 (湖や海のかなた)、地下の他界、日月の他界 (太陽や月)、天の他界である。これらは、地上、地下、天上の3つに集約される。柳瀬襄爾 (1966) の紹介をもとに、タイラー、スペンサー、ヴント3人の他界観念論をみると、この3つは共通しているので、次のように整理できる。進化的説明では、(1)(2)(3)の順に生じるといわれるが、その説は、ここでは採用せず、並列する。

- (1) 地上 (earth) の他界 [村落内 (村落にある死者の住居に霊が漂うので死者が出た家を捨てる習俗など)。生者の住居をやや離れた近隣の森林、近くの山の他界]。
- (2) 地下 (hades) の他界 [沈む夕日と関連した地下。洞窟や蛇と関連した地下。墓穴や埋葬された墓の下。陰気な影や暗い場所。地獄]
- (3) 天上 (heaven) の他界 [山頂の上の他界。上空。太陽。浄化や恍惚。昇天。天国]  
他界の性質としては、次の2つに分けられる。
- (1) 継続の理論 (continuance theory) [あの世はこの世の延長で、死は新しい世界への出発。あの世でもこの世と同じような生活が継続。]
- (2) 応報の理論 (retribution theory) [徳、富、名誉、階級など生前の地位や、死に方、葬送の仕方などが死後の幸福に関連する。死後の試練。死後の審判]

## 5 日本文化における「この世」と「あの世」の位置関係

日本文化の場合には、仏教渡来以前の他界観には、南方系と北方系が混ざっているといわれ、地上 (海上) 他界 (常世、ニライカナイ) である水平他界観と、古事記や日本書紀にある天上 (高天原)、地上 (草原中間)、地下 (黄泉の国) の3つからなる垂直他界観がみられる。万葉集には、堀一郎 (1951) がいうような山中他界観もみられる。山中他界とは、死霊がいく場所としての山であり、墓場、死と再生儀礼、山岳信仰や山岳修行とむすびついている。

梅原猛 (1989) は、アイヌと沖縄の他界観を日本人の原「あの世」観と呼び、それは次の特徴をもつという。(1)あの世はこの世と空間・時間秩序が反対という意味でアベコベだが、この世とあまり変わらない。あの世には天国 (極楽) と地獄の区別も死後の審判もない。(2)人が死ぬと魂は肉体を離れて、あの世に行って神になる。従って、ほとんどすべての人間は、死後あの世へ行き、あの世で待っている先祖の霊と一緒に暮らす。悪いことをした人間は、直ちにあの世へ行けないが、遺族が霊能者を呼んで供養すれば、あの世へ行ける。

沖縄とアイヌの他界観は必ずしも同じではない。しかし、この世とあの世に継続性があり、死

後人間が神になることでは共通している。

沖繩の久高島の神的空間概念は、比嘉康雄（1993）によれば、自然的空間と心的空間からなる。物理的なものを基にした自然的空間は、次の3つからなる。(1)天（ウティン、見上げる漠とした空間、太陽や月は天にあるのではなく通過するもの）。(2)地（ジーキ、生活の場。広義には海を含む）。(3)海（リュウグー地と同次元に連なるもの。他界は海の彼方にある）。

心的空間は、生と死を基にした抽象的空間観念であり、次の3つからなる。(1)現世（ナマガユー ナマ=現、今。ユー=世、時代、世界。集落内の世界）。(2)祖霊世（シジガユー シジ=女の祖霊。御嶽にいる祖霊の他界）。(3)神世（ハミガユー ハミ=神。海の彼方の他界。ニーラーハラー）。

アイヌの心的空間は、山田孝子（1994）によれば、相補的で二元的な宇宙観であり、(1)現実の世界であるアイヌ・モシリ（人間の世界）と(2)超自然的世界であるカムイ・モシリ（神の世界）の二世界で構成される。コタン（人間の村）は現実の世界であるが、コタンを中心として、自然神の世界は水平線上と垂直上に広がり、水平線においては両極に、山（クマ、オオカミのカムイ・モシリ）と海（魚類のカムイ・モシリ）（あるいは川上と川下）、垂直線においては両極に、空（神の国、鳥類のカムイ・モシリ）と地下（死者の国、蛇類のカムイ・モシリ）が配置される。あの世は、この世と同じで裏返しのあるあべこべの世界（とくに昼夜の逆転）である。あの世はカムイ・コタン「神の国」と呼ばれ、死者の魂の安住する楽しい世界である。

沖繩やアイヌの他界観だけではなく、日本文化の基層にある他界観では、他界は必ずしも超越世界でもなければ断絶した世界でもないようである。そこで日本人の他界観は、近傍他界観であるともいわれる（古東 1994）。

柳田國男（1946）は、「先祖の話」のなかで日本人の祖霊の特徴として死の親しさ、あの世の近さをあげている。それは4つの特徴にまとめられる。(1)死んでも国にとどまって遠くへは行かぬと思ったこと。(2)頭幽二界の交通が繁く、単に春秋の定期の祭だけでなく、何れか一方のみの志によって、招かることがさほど困難でないように思っていたこと、(3)生人の今わの時の念願が、死後には必ず達成すると思っていたこと、(4)再び三たび生まれ代わって同じ事業を続けられるように思っていたものが多かったこと。彼の祖霊論は、「仏教の浄土は途方もなく遠い処にありました。之に反して我々の祖霊は、高山の頂にいほりして麓の里を見下ろして、毎年季節を定めてもとの家を訪れて来るものと、考えられていたのであります。」ということばに集約される（柳田 1948）。

日本文化は多層からなっており、時代差も地域差も大きいので、その基層にある他界観をこのように簡単にまとめるのは無理がある。しかし、仏教伝来以前からの他界の表象体系が今も根づよく生きつづけているのではないか、そして、それは日本文化にだけ当てはまるのではなく、通文化的共通性もあるのではないかと想定することは可能である。もしこの想定が正しいならば、仏教やキリスト教やイスラム教などの世界宗教の普及よりも古層に属するからといって必ずしも「原始的」「未開」「低段階」と位置づけられる観念ではなく、より人間の生活実感に基づいた素朴な表象として普遍性も高い。そのような素朴表象（naive representation）は、人間と環境（時空を含んだ人間をとりまく世界）との関係のあり方を根底から考えるために、新たに見直すべき重要な観念であろう。

この研究は、以上のような問題意識から出発し、現代日本人の「この世」と「あの世」の関係表象の特徴をイメージ画から明確にすることを目的とする。その第1歩として、今回は両世界の位置関係に焦点をあてて、次の6つの観点から調べる。(1)あの世の空間的・意味的位置、(2)この世とあの世の境界、(3)この世とあの世を区別する標識、(4)この世の人とあの世の人のコミュニケーション、(5)この世とあの世の感情評価、(6)イメージ画の分析と言語による他界観質問項目との関係。

## 方 法

### 1 予備調査

〈被験者〉名古屋市近郊のS大学2年生(1)151人、(2)159人、(3)136人、計3回446人(全員女性)。  
〈調査年月〉1994年11月-1995年10月。他界に関連する種々の教示を試み、多種のイメージ画調査を行った。さらに1、2回目のイメージ画をもとに、第一著者と8人の大学生により、KJ法によるブレinstローミングを行った。1回目113、2回目96の特徴抽出と図解分析から、ボトム・アップで分析指標を抽出した。

### 2 質問紙の作成

予備調査をもとに、A4用紙5ページ、5領域からなる質問紙を作成した。そのうち(2)のこの世とあの世の関係イメージ画は、タイラーのいう来世信仰の2群のうち、おもに来世観念に焦点をあてた質問にあたる。(3)のたましいの往来イメージ画は、おもに靈魂輪廻に焦点をあてた質問にあたる。(5)の他界観質問項目の選定にあたっては、金児(1987, 1993, 1995)の来生観尺度や死生観尺度を参考にした。

(1) 1枚目 フェイス・シート。調査年月日、年齢、性、学校名(学科学年)、生まれた所、おもに育った所、現在住んでいる所、家族と同居の有無、近親者のうち死別した人、死に身近に立ち会った経験の有無と対象、自分が死ぬかと思った経験の有無、死を想像して恐怖した経験の有無、家族の宗教(宗派)、あなたの宗教(宗派)。

(2) 2枚目 この世とあの世の関係イメージ画。

もし死後の世界があるとしたら、どうでしょうか？ あの世にいる人と、この世の人との関係をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。

(3) 3枚目 たましいの往来イメージ画

もし死んでも「たましい」があるとしたら、どうでしょうか？ 亡くなった人のたましいが、この世からあの世へ「いく」過程、あの世からこの世へ「かえる」過程をイメージして絵に描いてください。説明をつけ加えてください。

(4) 4枚目 身近な人との死別体験と死後のイメージ変化プロセス。(詳細は省略)

(5) 5枚目 他界観質問項目10項目。まったく反対から、まったく賛成まで4件法。

1) 死者の供養をしないと、たたりがあると思う。2) 祖先崇拝は美しい風習である。3) 死後の世界はあると思う。4) 恨んで死んだ人の霊が不幸をもたらすことがある。5) 地獄・極楽というのは迷信である。6) 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ。7) 神や仏を

そまつにすると、ばちがあたる。8) 水子供養はするべきである。9) 神様や仏様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いがかなえられる。10) 亡くなった人が自分を守ってくれるように感じる。

### 3 本調査

〈被験者〉東京首都圏のT大学(理科系)の学生134人。愛知県のA大学(教員養成系)の学生285人、計419人(男163人、女256人)。

このうちイメージ画分析においては、イメージ画に白紙回答(他界観質問項目のみに回答)した者を除外し、分析対象者は、計332人(男128人、女204人)。

〈調査手続き〉調査日時。1995年11月～1996年2月。大学の授業の一部の時間を用い、教師が被験者に上記の質問紙を配布し、集団で調査を行った。所要時間は、約30～40分であった。被験者には、絵の巧拙は問わないので自由に描いてほしいこと、絵は具体的でも抽象的でもかまわないことを教示した。

## 結 果

本稿では、上記の質問紙調査の5領域のうち、(2)この世とあの世の関係イメージ画の分析および(5)他界観質問項目についてのみ報告する。統計的分析には、本調査の被験者のみを用いた。性差はほとんど有意差がなかったので、全体の数値で報告し、性差のある部分のみ男女別にした。イメージ画の事例表示については、同じ質問から得た予備調査結果の一部を含めた。

表1 この世に対するあの世の空間的位置(数字は%)

| 垂直<br>59.3 |     |     | 斜め上<br>15.3 |      | 水平<br>12.0 |     | その他<br>13.3 |
|------------|-----|-----|-------------|------|------------|-----|-------------|
| 上          | 上下  | 下   | 左           | 右    | 左          | 右   |             |
| 53.0       | 4.5 | 1.8 | 3.6         | 11.7 | 4.5        | 7.5 |             |

## I この世とあの世の関係イメージ画の分析

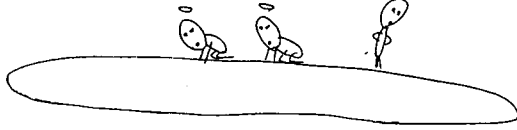
### 1 この世とあの世の位置関係

#### 1-1 あの世の人の空間的位置

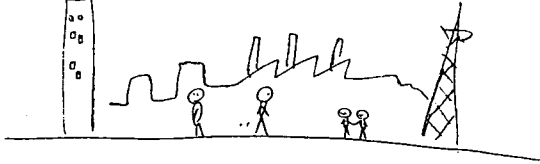
この世の人とあの世の人が、どのような配置によって描かれたかを、空間的位置と意味的位置に分けて整理した。空間的位置とは、紙面上の描画の空間配置のみを指標とするものである。具体的には、「あの世の人が描かれた位置」が、「この世の人が描かれた位置」と比べて、次の8カテゴリーのどれにあたるか分類した。①上 ②上下 ③下 ④斜め(左上) ⑤斜め(右上) ⑥左 ⑦右 ⑧その他。

その結果を表1に示す。分布は一様でなく( $\chi^2 = 110.97$ ,  $df = 2$ ,  $p < .01$ ), 全体の6割という大多数がこの世とあの世を垂直構造でとらえており、そのうちほとんどの人があの世を上部

あの世の人はこの世の人を見下している。



「この世の人は『あの世』なんて存在するのかな?」と尋ねる



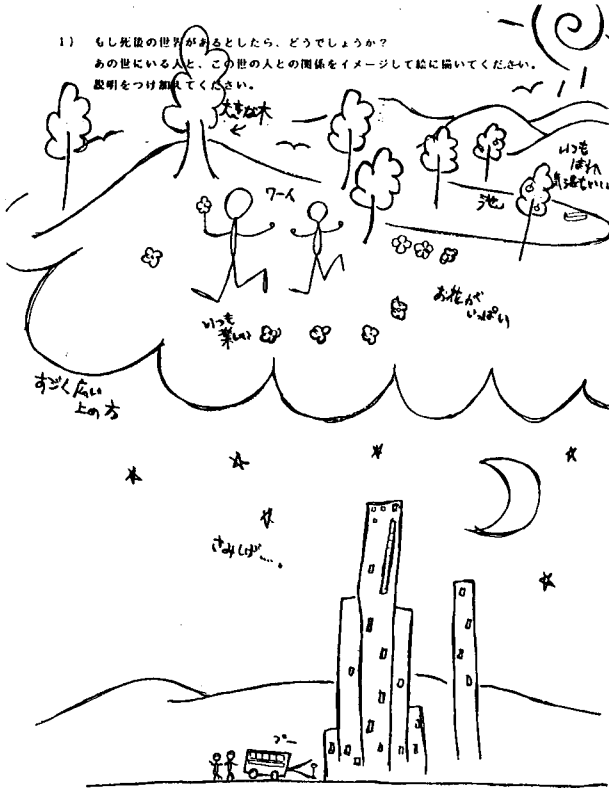
### 例1 雲の上の世界

A大男性20歳 (No. 271) 垂直上配置の典型例 (大多数と一致)。

- 1) 空間的, 意味的位置: 垂直位置。あの世がこの世より上。
- 2) 境界: この世とあの世のあいだに分離があり, 境界は雲で区切られている。
- 3) 区別の標識: あの世の人の頭に光輪 (人間・付加・光輪)。
- 4) コミュニケーション: あの世からのみ可能。「見る」。
- 5) 感情評価: この世, あの世ともに中性。

1) もし死後の世界があったら、どうでしょうか?

あの世にいる人と、この世の人との関係をイメージして絵に書いてください。  
説明をつけ加えてください。

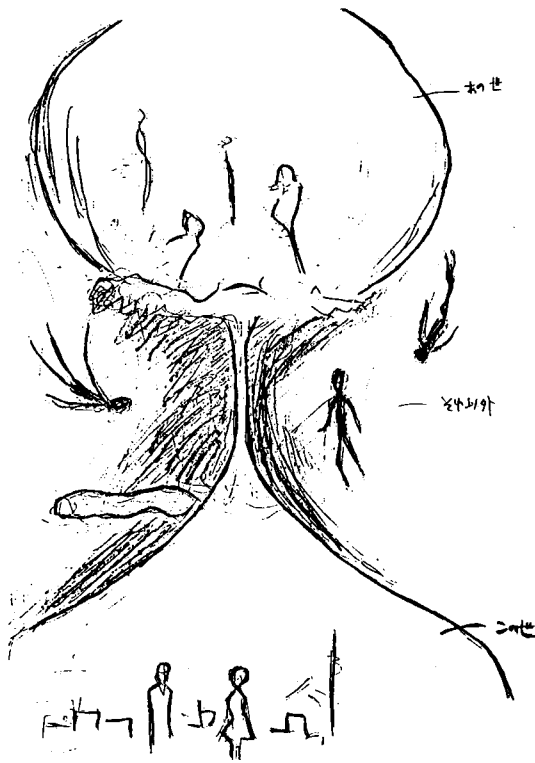


### 例2 上部の自然世界

A大女性19歳 (No. 321) 垂直上 (自然, あの世肯定)。

- 1) 空間的, 意味的位置: 垂直配置。あの世がこの世より上。
- 2) 境界: この世とあの世のあいだに分離があり, 境界は雲で区切られている。
- 3) 区別の標識: あの世は自然 (環境・自然・花・太陽)。この世は人工的。
- 4) コミュニケーション: 不可能。
- 5) 感情評価: この世は否定 (さみしげ), あの世は肯定 (いつも楽しい, 晴れ, 気持ちいい)。

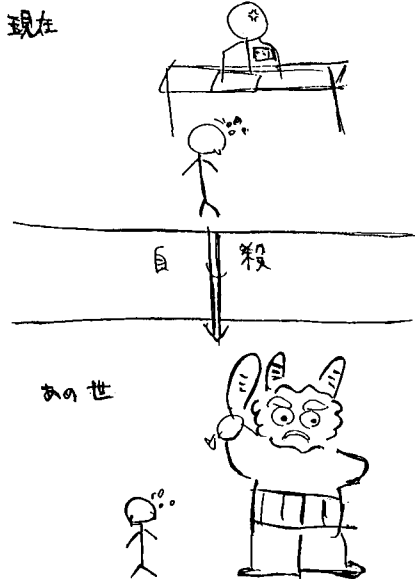




例3 中間帯のある上部世界

A大女性20歳 (No. 451)  
 (説明文) あの世界とこの世を結ぶ空間があり、それは閉じられた空間となり普段は行き来できない。あの世界に行くほど実体的のない精神世界となる。

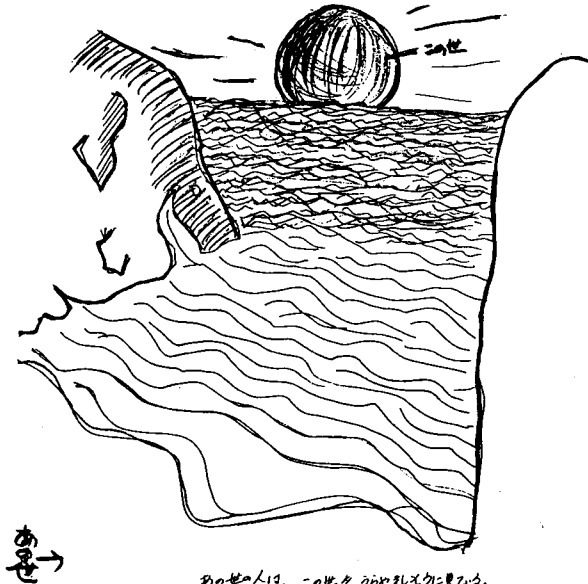
・あの世界は、この世と結ぶ空間があり、それは閉じられた空間となり、普段は行き来できない。  
 ・あの世界に行くほど、実体的のない精神世界となる。



例4 下部世界

A大男性19歳 (No. 262) 鬼のいる世界。垂直下。

- 1) 空間的、意味的位置：垂直配置。あの世がこの世より下。
- 2) 境界：分離があり、境界は線で区切られている。
- 3) 区別の標識：この世とあの世の人々は似ている。超越的存在（その他）あり。
- 4) コミュニケーション：不可能。
- 5) 感情評価：この世、あの世ともに否定。



例5 海上他界に近い下部他界

S大女性20歳 (No. 37)

(説明文) あの世界は、この世をうらやましそうに見ている。あの世界からみると、この世はにぎやかで楽しそう。あの世界からこの世は見えるが、この世からあの世界は見えない。あの世界からこの世に近づくことはできても、行くことはできない。この世の人は行こうと思えば、すぐにでもあの世界へ行ける。

あの世の人は、この世をうらやかし外に見てる。  
 あの世界見ると、この世はにぎやかで楽しそう。  
 あの世界から、この世は見えるが、この世からあの世界は見えない。  
 あの世界から、この世に近づくことはできても、行くことはできない。  
 この世の人は、行こうと思えば、すぐにでもあの世界へ行ける。



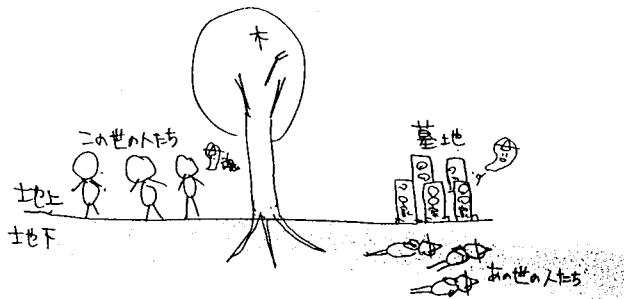
例6 上下の世界



死体は、物質として循環する。  
 魂は魂として浮遊したり、  
 人につながりたりする。

T大女性21歳 (No. 134) 魂の循環・偏在。垂直上下。

- 1) 空間的、意味的位置：垂直配置。あの世界の人は地上にも、天上にも、地下にもいる。
- 2) 境界：地上と地下には分離あり(線)。地上と天上には空間的隔たりのみ。
- 3) 区別の標識：人間(足の脱落, 身体衣服)
- 4) 感情評価：この世, あの世界とも中性。



に描いていた(例1, 2, 3参照)。

例1は、雲の上の他界をあらわす。雲上のあの世から下界のこの世を見るという構図である。これは、空間的位置だけではなく、以後の分析(境界, 区別の標識, コミュニケーション, 感情評価)においても大多数の人々が描いた特徴と合致する、もっとも典型的な構図であった。

例2は、花や太陽のある楽園のイメージをもつあの世の絵であり、この構図も多く見られた。また、例1と例2の特徴の一部を合わせもつ絵(花のある雲の上のあの世から、下界にいるこの世の人々を見る)も頻繁に出現した。

例3は、上部他界の世界構造をよく表している絵である。上部世界は形態のない気体化した精神世界で成立しており、二つの世界は、ごく細い通路でつながっている。中間には浮遊する黒い幽体状の像が漂っている。

あの世が下部にある絵は少なかった(例4, 例5参照)。例4のような地下他界, 地獄, 鬼のイメージは希にしか出現しなかった。この絵は例外的な部類に入るし、鬼もユーモラスで、地獄絵にあるような怖さをもっていない。現代の若者にも、地獄のイメージはよく知られているはずだが、ほとんど描かれなかったのは特筆に値する。

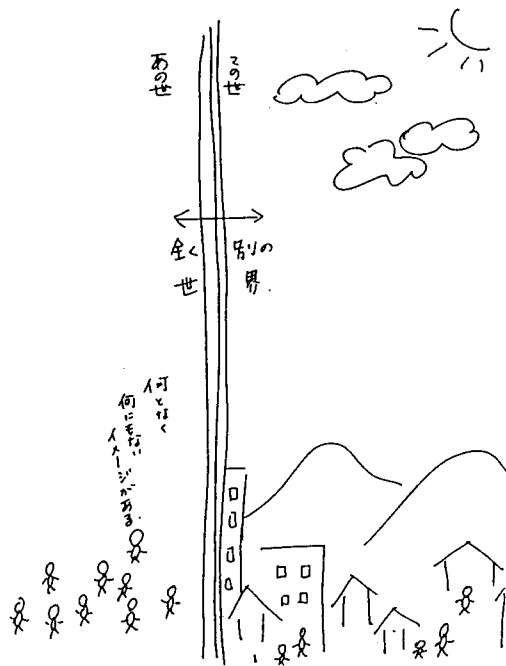
例5は、斜め下部に描かれた(意味的位置は、同一平面)、海を越えた別の陸地としてのあの世の絵である。手前の陸地があの世, そこから玉として見えるこの世を見た風景が描かれている。きわめて希な絵であるが、海上他界のイメージに近いものとして特記したい。この陸地は、斜め下部にあり、「あの世の人は、この世をうらやましそうに見ている。あの世から見ると、この世はにぎやかで楽しそう」という説明からみても、感情評価的には否定的で、常世やニライカナイのような楽園のイメージはない。

あの世が上部と下部の両方に描かれた絵もきわめて少なかったが、その多くはあの世の人や魂の居場所が定まらず、いろいろな所に偏在するという絵であり、レヴィ=ブリュールの記述とも一致し、内容的には興味深かった(例6参照)。例6では、地下にいる「あの世の人たち」は、死体の形で横たわり、「魂」は足を失って地上にも天上にも浮遊しており、「あの世の人」の形態が2種に描き分けられている。頭につけた死者の印である三角布は、両者に共通している。

あの世とこの世の位置関係を水平構造でとらえた絵は少数であった(例7, 8参照)。例7のように2つの世界が、線や壁や鏡で分断されているタイプ(完全に分離し没交渉のものと、部分的にコミュニケーション可能なものがある)と、例8のように同じ世界のなかに、この世の人とあの世の人が共存しているタイプの2種が見られた。

例8のような同一世界に共存している例は、近傍他界という観点からみると興味深い。このタイプでは、後の分析(例14)で示すように「あの世の人」は「この世の人」に比べて何らかの変形があり、形態に差異がつけられていた。例8では、あの世の人には、瞳がない(empty eye)という特殊形態であった。例7のように、この世とあの世で世界が明瞭に分かれる場合には人間の形は同形であることも多いが、例8のように同じ世界に共存する場合には、人間の形に差異化がなされる傾向があった。

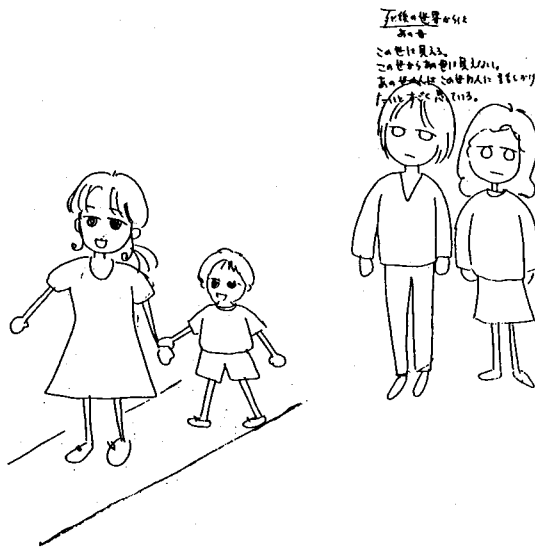
空間配置の左右差については、水平と斜め上の分類を合わせてみると、あの世が左にある場合が全体の8.1%、右の場合が19.2%で、あの世は右側に描かれることが多かった(表1参照。  $\chi^2 = 15.04$ ,  $df = 1$ ,  $p < .01$ )。



例7 水平の世界

A大女性19歳 (No. 308) 別世界。水平。

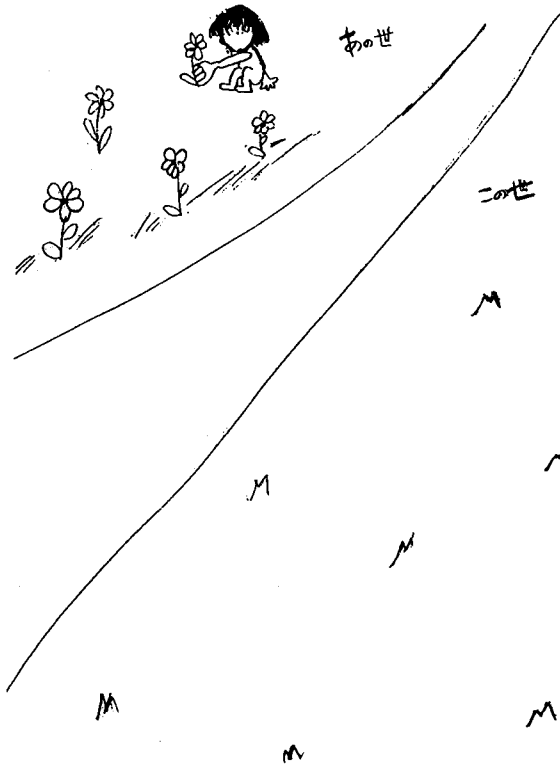
- 1) 空間的, 意味的位置: 水平配置。あの世がこの世より左。
- 2) 境界: 分離あり。境界は線で区切られている。
- 3) 区別の標識: 人間は似ている。環境がちがう。
- 4) コミュニケーション: 双方不可能。
- 5) 感情評価: この世は肯定。あの世は中性。



例8 同一世界に共存する水平世界

S大女性20歳 (No. 31) 同一世界に共存。水平。

- 1) 空間的, 意味的位置: 水平位置。あの世がこの世より右。
- 2) 境界: 分離なし。
- 3) 区別の標識: 人間は似ている。目が異なる (人間・差異・顔)。
- 4) コミュニケーション: あの世からのみ可能。「見る」
- 5) 感情評価: この世, あの世ともに中性。



例9 彼岸としての世界

S大女性20歳 (No. 6) 川で隔てられたあの世 (日本の臨死体験に多い)

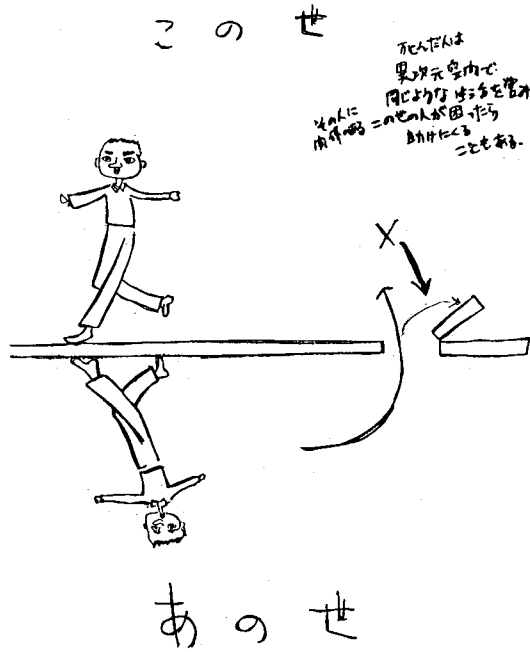
- 1) 空間的, 意味的位置: 斜め上。あの世がこの世より上。意味的位置: 同一平面。此岸に対して彼岸。
- 2) 境界: 分離あり。川で区切られる。
- 3) 区別の標識: 標識あり。環境 (自然・花)。
- 4) コミュニケーション: 不可能。
- 5) 感情評価: この世, あの世ともに中性。

1-2 意味的位置と世界の構造

この世とあの世の位置関係には、紙面上の空間配置とは別に、意味的にみた位置関係が考えられる。たとえば、あの世は空間的には水平に描かれていても、それが「天国」と名づけられていれば、意味的には「上」にあると考えられる。そこで意味的位置を次の7カテゴリーに分類した。その結果を以下に示す。①上 (59.9%) ②上下 (3.04%) ③下 (2.4%) ④同一平面 (25.6%) ⑤逆転世界 (1.8%) ⑥その他 (0.9%) ⑦不明 (6.3%)。

このように意味的位置を別に分類しても、垂直軸に関しては空間的位置と大きく違わなかった。後者のほうがより客観的に同定できるので、今後は空間的位置関係をみるだけで十分であろう。水平軸に関しては、個々の例については若干の問題が残る。しかし、斜め上と水平を合わせれば、「同一平面」とほぼ同率であったことを考えると、斜め配置は、どちらかといえば水平配置のなかに組み込むことが可能である。たとえば、先に示した例5の海上他界イメージでは、空間的位置は斜め下、意味的位置は同一平面 (此岸と彼岸) と分類される。また、別の例9は「川で隔てられたあの世」という日本の臨死体験でよく見られるイメージだが、空間的位置は斜め上、意味的位置は同一平面と分類される。こうしてみると水平軸も空間的位置によって判断してほぼ間違いないうであろう。

なお、意味的位置関係を示す独自の項目として、「逆転世界」の項目をつくった。それは数値的には多くはなかったが (1.8%), 例10のような、この世とあの世が相同で逆転している、あべ

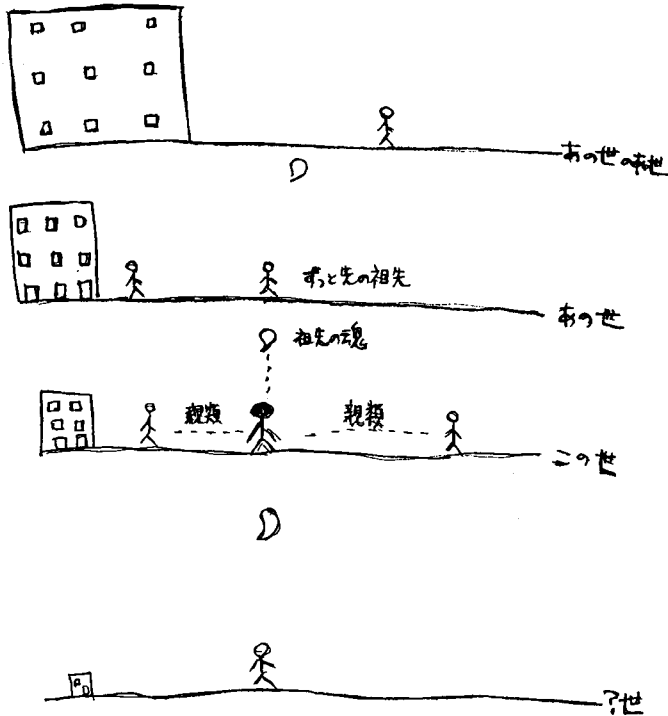


例10 逆転世界

S 大女性20歳

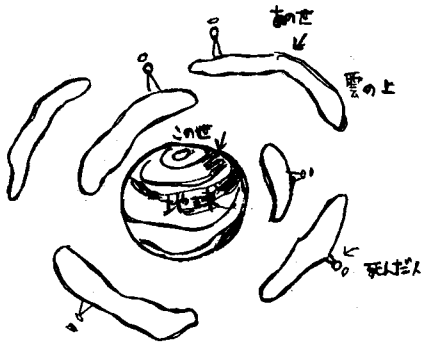
(説明文) 死んだ人は異次元空間内で同じような生活を営み、その人に関係するこの世の人が困ったら助けにくることもある。

〈例10～例13は、さまざまな他界の例〉



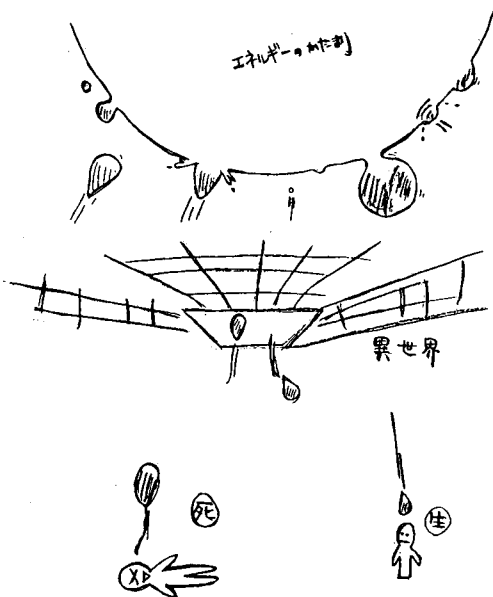
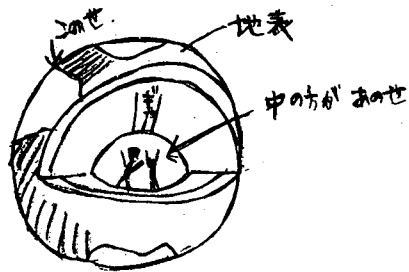
人間と魂とで交互に生きていく、あの世は未来かも……

あの世はこの世の外と内にある。



例12 入れ子世界

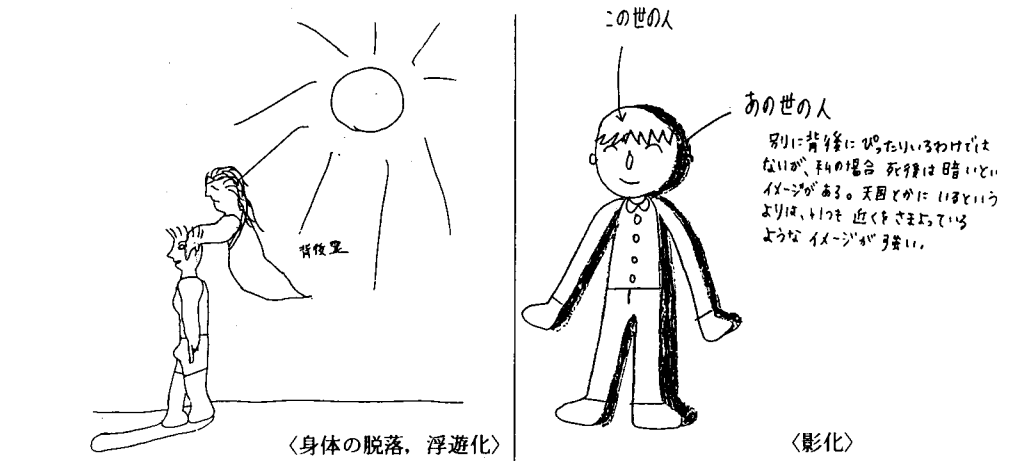
A大女性20歳 (No. 434)  
(説明文) あの世はこの世の外と内にある。



例13 循環世界

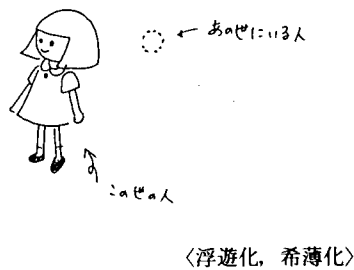
A大男性19歳 (No. 258)  
(説明文) 「死」から異世界へ行き、エネルギーのかたまりになって、また異世界を通して生まれかわる循環が描かれている。

やまだ・加藤：イメージ画にみる他界の表象



この世の人の名前はあの世にいる人のたましいだけがある。肉体はなくなっても、気は残っていると思う。

あの世の人はこの世の人をまいてどこかにいる。



例14 あの世の人間の変形 (同一世界に共存する場合)  
4例 (身体の脱落, 浮遊化, 希薄化, 影化 — 2種類)

こべの関係を表す興味深い構図である。

その他に、意味的位置関係を表す関係図としては、「多層 (例11)」「入れ子 (例12)」「循環 (例13)」「相同」「無形 (闇, 渦, 無)」など別個のカテゴリーを作成することも考えられたが、いずれも少数であったので典型例を表示するにとどめる。

あの世は単数 (another world) か、複数 (other worlds) かは問われるところであるが、あの世が複数あり、上と下に分かれたり、何らかの分岐や階層化によって、「良い世界 (天国・極楽など)」と「悪い世界 (煉獄・地獄など)」に分かれる絵は少なかった。あの世は複数ではなく、また生前の行為によって応報的に他界が分かれるわけではなかった。あの世は平等にひとつであり、しかも肯定的 (4-2の分析参照) に描かれる傾向があった。



## 2 この世とあの世の境界

### 2-1 この世とあの世の分離と境界の標識

図1のように、この世とあの世が別の世界として分離しているか、同じ世界のなかに共存しているかを、分離の表現形態で調べた。その結果、何らかの分離を表示した絵が8割以上あった。大多数の人にとって、あの世はこの世と分かれた別世界として表象されていることがわかる。

この世とあの世が分離されていない絵も約1割ながら現れた。これは近傍世界観を示すものとして興味深い。典型的な絵は、例8のように、この世とあの世の住人が同じひとつの世界に共存しているものである。ただし共存していても、「影化」「身体の一部の脱落（足がない etc.）」「機能の差異（この世の人には見えない etc.）」など何らかのかたちで、この世の人とあの世の人の差異化はなされていた（2-2の分析および例14参照）。

次に、この世とあの世に分離がみられる絵について、境界がどのような標識で区切られているかをみたところ、図1のように、線、雲、空間的隔たりによって区切られることが多かった。事例では、例2、例4、例6、例7などが「線」で区切られた例である。「雲」は例1、「空間的隔たり」は例6の一部に見られる。例9のような、いわゆる三途の川の表象である「川」は第4位（5.1%）で、「橋」（1.2%）とともに、それほど一般的ではなかった。しかし、この出現比率を多いとみるか少ないとみるかは見方によるだろう。山や海は、ほとんど出現しなかった。

その他で注目すべき標識としては、壁、扉（例10）、階段、鏡などがみられたが、いずれも少数であった。

### 2-2 この世の人とあの世の人を区別する標識

表2は、この世とあの世、および、この世の人とあの世の人の区別がどのような標識で表現されているかを調べたものである。

まず区別があるかどうかで大きな分類がなされた。この世とあの世を区別する標識なしは、22.9%であり、多くは何らかの区別が表示されていた。

この世とあの世に区別の標識がみられる場合には、その標識を環境、人間、超越的存在の3つに分類した。ここで扱う区別の標識は、2-1の境界の標識と重複して数えられる場合があった。たとえば「この世の人が地面の上におり、境界に雲が描かれ、その雲の上にあの世の人がいる」絵の場合には、「雲」は境界の標識であるとともに、この世の人がいる地面と区別された「雲」という自然環境をあらわしてもいるからである。

環境、人間、超越的存在の3分類は、さらに次に示すような詳細なカテゴリーに分類された。いずれも、一人の絵に複数の標識が描かれていれば重複してチェックされた。環境による標識としては、あの世には、雲、花、太陽などの自然物が多く描かれていた（例1、例2、例9など）。この世には建物や車など人工物が描かれ、あの世には雲や花や太陽など自然の情景というように、人工と自然が対比的に描かれている絵も多かった（例2など）。これらにおいては、花や太陽のある美しい自然の風景が、あの世の風景としてイメージされており、あの世には理想郷としての他界や、なつかしい原風景、あたたかい母の国としての原郷のイメージが重ねられていると考えられる。火や池や地獄のような怖い環境が描かれることは、きわめて少なかった。また、多くが自然標識であり、2-1で述べた境界の標識の場合と同様に、あの世が人

工物で特徴づけられることは、わずか3.6%であった。

人間の形態による区別は、全体として46.1%にみられた。付加は、聖なるものの印が多かった。天使のような羽や、頭の上の聖なる光輪（例1）などである。脱落は、幽霊には足がないという江戸時代に普及したイメージのためか、足の脱落が多かった（例6，例14の一部）。他には、衣服の相違（白い長衣など）、顔（表情の違いや、顔の一部の変形，例8），身体の変化（足以外の身体の一部が欠落，影化など，例14），もちもの（三角印や杖など）で区別された。

超越的存在による区別は、全体で15.7%と少なく，天使，神・仏，たましいなどが描かれることが多かった。

以上のように，あの世はこの世と区別されているが，大きく異なる別世界とは想定されず，超越の場所でもなく，この世の世界と類似した親しい世界として描かれていた。あの世の人は，この世の人とほとんど同じ「人間」の形によって描かれており，輪や羽などが付加するか，身体の一部が変化するか，衣服やもちものが相違するか，いずれにしても，ごくわずかの標識で区別されていた。

図1 この世とあの世の境界（標識は重複可）

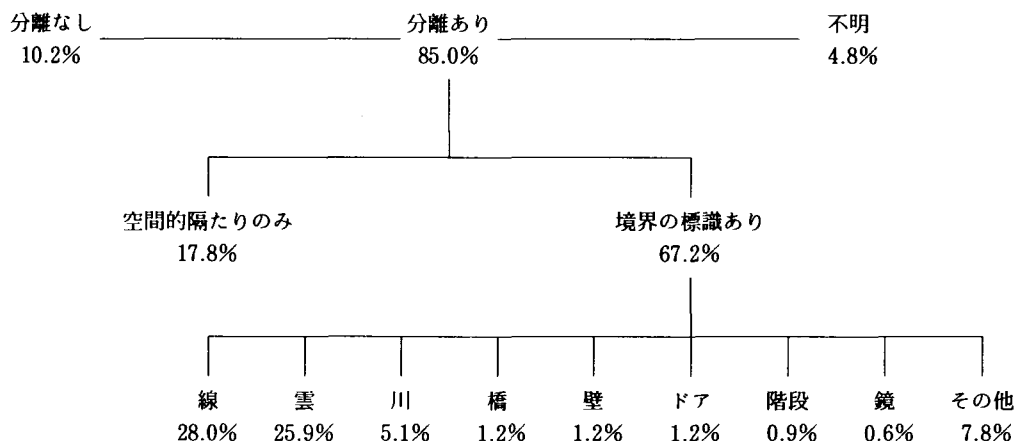


表2 あの世をこの世から区別する標識の出現率（数字は%）

| 標 識 あ り 77.1 |        |        |          |          |         |         |         |       |         |            | 標識なし    |         |          |       |        |
|--------------|--------|--------|----------|----------|---------|---------|---------|-------|---------|------------|---------|---------|----------|-------|--------|
| 環 境 45.8     |        |        |          | 人 間 46.1 |         |         |         |       |         | 超越的存在 15.7 |         |         |          |       |        |
| 自 然 44.3     |        |        |          | 人工 3.6   | 付加 26.2 |         | 脱落 19.6 |       |         |            | その他 6.3 | 神・仏 3.0 | たましい 6.0 | 他 6.9 |        |
| 花 6.9        | 雲 31.9 | 太陽 3.9 | その他 12.7 |          | 羽 5.7   | 光輪 25.6 | 足 9.9   | 顔 3.0 | 衣服 12.7 | もちもの 2.4   |         |         |          |       | 身体 6.6 |
|              |        |        |          |          |         |         |         |       |         |            |         |         |          |       | 22.9   |

\* 「標識あり」と「標識なし」の出現率は相互背反的。それ以外の標識カテゴリーは重複可。したがって，下位カテゴリーの比率合計は上位カテゴリーの比率に一致しない。

### 3 この世とあの世のコミュニケーション

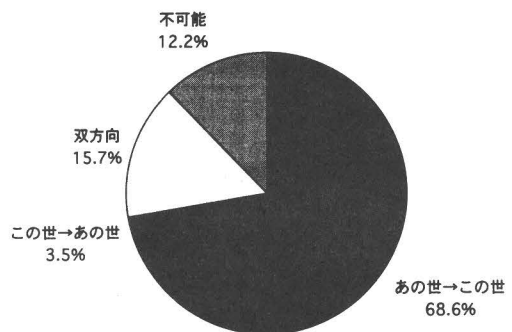
#### 3-1 この世とあの世のコミュニケーション可能性と方向

絵と説明文から、この世とあの世のコミュニケーションの可能性と方向性を調べた（独立して判断した二人の一致率は、90.7%）。判断可能であった絵（全体の51.8%）の内訳を、図2に示す。コミュニケーションが不可能で断絶しているものは少なく、多くは可能とみなされていた。しかし、双方向ではなく、あの世からこの世への働きかけは可能であるが、この世からあの世への働きかけは不可能という、一方向のコミュニケーションが多く想定されていた。

#### 3-2 あの世の人はこの世の人に何をするか

この世とあの世のコミュニケーションが可能の場合に、あの世の人が何をしているか、あの世の人の行為を分類した。見る・見守る（30.7%）、側にいる（6.3%）、救う（1.5%）がおもな行動で、何もしていない絵も半数近くみられた。あの世の人からのコミュニケーションといっても、「救う」などの積極的な行為はきわめて少なく、まして「恨む」「脅す」などのネガティブな行為は希であった。もっとも多かったのは、ただ単に「見る」「見守る」という行為であった。しかもその多くは、あの世の人を怖れず好意的であり、あの世の人からはこの世の人が見えるという透視力の強調や、あの世の人があたたかくこの世の人を見守ってくれるという穏やかな行為が描かれていた。

図2 この世とあの世のコミュニケーション



### 4 この世とあの世の感情評価

#### 4-1 各々の世界の感情評価

「この世」、「あの世」の各々について別々に、次の5カテゴリーに分けて感情評価を調べた（判断の一致率は、94.1%であった）。

「この世」に関しては、①肯定的（1.8%）、②否定的（6.6%）、③両価的（1.8%）、④中性（61.7%）、⑤不明（28.0%）であり、この世は可もなく不可もなく中性的に描かれることがもっとも多かった。

「あの世」に関しては、①肯定的（19.1%）、②否定的（3.9%）、③両価的（6.3%）、④中性（50.6%）、⑤不明（20.2%）であり、あの世は肯定的に描かれることが多かった。あの世が地獄のような否定的な場所として描かれることは、きわめて少なかった。

#### 4-2 この世とあの世の感情評価の特徴

「この世」と「あの世」の両者を関連させ対比したときに、どのような感情評価がみられるかを調べたものが表3である。

表3 この世とあの世のそれぞれに対する感情評価（数字は人数）

|             |        | こ の 世 |     |     |        |
|-------------|--------|-------|-----|-----|--------|
|             |        | 肯 定   | 否 定 | 両 価 | 中性, 不明 |
| あ<br>の<br>世 | 肯 定    | 2     | 18  | 2   | 41     |
|             | 否 定    | 1     | 1   | 1   | 10     |
|             | 両 価    | 0     | 0   | 1   | 20     |
|             | 中性, 不明 | 3     | 3   | 2   | 227    |

全体としては、中性・不明の絵が多かった。表3をみると、何らかの感情評価が可能な場合には、あの世がこの世よりも良いと肯定的に評価されたことがわかる。この世は可もなく不可もなし（中性）でもあの世は良い所とみなしたり、この世を否定的・あの世を肯定的と対比して描く人が多かった。この世と比べてあの世を否定的にみる傾向は、きわめて少なかった。

## II イメージ画と他界観質問項目との関連

### 5 他界観質問項目の回答

#### 5-1 他界の存在の肯定率

他界観を調べる10項目の質問項目の回答比率を表4に示した。被験者はイメージ画を描かなかった者も含めて419人である。4件法の回答を「賛成」と「反対」に二分した結果をみると、全体に賛成率が高いことがわかる（ただし、項目5は逆転項目）。特に、Q3死後の世界があると思う、Q6人は死んでも繰り返生まれ変わるものだ、Q10亡くなった人が自分を守ってくれるように感じる、Q1死者の供養をしないとたたきがあるなど、死後の世界の存在を肯定する項目に、60%以上の賛成率が見られるたことは注目に値する。

#### 5-2 因子分析の結果

10項目の回答結果を1点から4点まで得点化し、いずれかの項目に未回答のあった20名を除いた399名の回答者の得点のデータ行列を因子分析した。共通性の初期値を1とし、主因子法により因子の抽出を試み、2因子解を適当と判断した。バリマックス回転後の2因子の累積寄与率は54.9%であった。因子の解釈に用いる項目は、.50以上の負荷量をもつことを基準とした。なお、男女それぞれを因子分析した場合も、全体の分析結果とほぼ同様の因子構造が認められた。

第1因子は、表4に示す6項目であり、いずれも死後の霊魂にかかわることから、「祖霊因子」と命名した。第2因子は、3項目あり、いずれも死後の世界や運命に関係しているので、「他界因子」と命名した。

第1因子の6項目と第2因子の3項目のそれぞれの得点合計を祖霊得点、他界得点として、男女別に平均をみると、前者では女性の得点が有意に高く（男性16.3、女性17.4、 $t = 2.82$ 、 $df = 258$ 、 $p < .01$ ）、後者でも有意に高かった（男性7.9、女性8.1、 $t = 2.82$ 、 $t = 1.69$ 、 $df = 283$ 、 $p < .10$ ）。女性のほうが祖霊や死後の世界を信じる傾向が高いといえよう。

### 5-3 描画を描かなかった人の特徴

イメージ画と質問項目に共に回答した人(332人)と、イメージ画を白紙で回答し、他界観質問紙にのみ回答した人(87人)の傾向を比較した。その結果、両者の回答に差はみられなかった。絵画を描かなかった人も、描いた人と、信念傾向に大きな違いがないわけである。先に示したイメージ画の分析は、特別な信念傾向の人(死後の世界を肯定する者など)のみの回答が対象ではないことが確認された。

### 5-4 イメージ画と他界観質問項目との関係

イメージ画の特徴分析に用いた4つの指標(1位置関係, 2境界, 3コミュニケーション, 4感情評価)と2つの因子得点との関係を調べた。その結果, 1, 2, 3とは関連がみられず, 4の指標のみ関連がみられた。あの世を否定的にイメージする者は, 肯定的にイメージする者や両義的にイメージする者に比べて, 祖霊得点の平均が有意に低いことが明らかになった(ポジティブ評価〔P〕の平均得点-16.9, ネガティブ評価〔N〕の平均得点-14.6, 両義的評価〔PN〕の平均得点-18.3, PとNの差  $p < .05$ , NとPNの差  $p < .005$ )。これは, あの世に否定的イメージをもつ者ほど, 祖霊の存在やその現世への働きかけに懐疑的であることを示している。

表4 各質問項目の賛否の回答の割合

|                  |                                       | 反対    | 賛成    | 無回答  |
|------------------|---------------------------------------|-------|-------|------|
| 祖<br>霊<br>因<br>子 | Q 1. 死者の供養をしないと, たたりがあると思う            | 25.8% | 73.3% | 1.0% |
|                  | Q 2. 祖先崇拜は美しい風習である                    | 30.6% | 68.0% | 1.4% |
|                  | Q 4. 恨んで死んだ人の霊が不幸をもたらすことがある           | 33.9% | 65.4% | 0.7% |
|                  | Q 7. 神や仏をそまつにすると, ばちがあたる              | 25.0% | 74.2% | 0.7% |
|                  | Q 8. 水子供養はするべきである                     | 15.3% | 82.9% | 1.9% |
|                  | Q10. 亡くなった人が自分を守ってくれるように感じる           | 31.0% | 67.1% | 1.9% |
| 他<br>界<br>因<br>子 | Q 3. 死後の世界はあると思う                      | 33.4% | 65.4% | 1.2% |
|                  | Q 5. 地獄・極楽というのは迷信である                  | 48.7% | 50.1% | 1.2% |
|                  | Q 6. 人は死んでも, 繰り返し生まれ変わるものだ            | 36.0% | 62.6% | 1.4% |
|                  | Q 9. 神様や仏様を信心して願いごとをすればいつかその願いがかなえられる | 48.7% | 49.6% | 1.7% |

## 討 論

### 1 あの世はどこにあるか

#### 1-1 天上世界のイメージ

イメージ画の分析から, この世とあの世の位置関係については, 全体の約6割の人が二つの世界を垂直構造で描き, あの世を上位置づけていることがわかった。この世とあの世は分離され

ており、境界の標識としては線や雲で区切られることが多く、あの世は、「雲上他界」「天上他界」としてイメージされていた。

あの世が上にある場合にも、山上他界や、地面からの連続線上にある山中他界のイメージはきわめてまれであり、現代の都会の若者のイメージでは、「山」の表象は他界と連結していないようである。

垂直軸と水平軸は人間の空間のもっとも単純な図式を構成しているといえよう（Bollnow 1963）。垂直軸は、「上に高く昇っていかうとする」こと、水平軸は「横のひろがりの中におし進んでいく」ことである。垂直軸は、人間の日常経験からの飛翔や超越を含むので想像力によって別のリアリティを創造するのにふさわしく、水平軸は、具体的空間経験の延長上にあり、道や旅などの人生行路の延長としてのメタファーとなりやすい。あの世は、「上に昇る」というイメージをもっており、空間軸での上は価値的にも上であるという意味と連動しているようである。

なお、ここでみられた垂直軸と水平軸上の空間配置や画面分割などを、バウム・テストや風景構成法（中井 1984）の研究結果とつきあわせてみることは、今後の重要な課題である。

### 1-2 同じ世界に共存—水平（地上）他界のイメージ

あの世が空間的な紙面配置で水平軸上にある描画は、全体の12パーセントであり、意味的にみて同一平面にある描画は、約25パーセントに達した。あの世を此岸と彼岸のように水平軸上でとらえる人々は、かなり多かったといえる。水平軸上で描かれた他界は、具体的な体験世界の延長にあるという意味で、必ずしも地面が描かれていなくても地上他界であるといえよう。ただし、境界としての「川」や「橋」は、あまり多く出現しなかった。

特に興味深かったのは、世界を2つに分けるのではなく、同じ世界のなかに、この世の人とあの世の人が共存している絵であった。これは、近傍他界のひとつの形態であろう。

同じ世界に二つの世界の異質の人間がいる場合には、天上他界のように世界が明確に分かれる場合よりも、希薄化、影化など人間の形態に大きな加工がみられ、異質であることが強調されていた（例14参照）。また、あの世の人からこの世の人は見えるが、この世の人からあの世の人は見えないという、コミュニケーションの一方通行が強調されていた。

この世とあの世の空間配置の左右軸をみると、この世は左、あの世は右に位置づけられることが多かった。その理由は、一つには時間軸において、過去を左に未来を右に描きやすい傾向と関連づけられる。もう一つは、左右の意味空間の分節化として、おそらく右利きが多数をしめることから、聖、善、強は右に、汚れ、悪、弱は左に位置づけられやすいことと関係する（Tuan, 1977）。本研究では、あの世のほうが肯定的であったので右に描かれたとも考えられる。

### 1-3 地下他界や上下他界のイメージ

垂直構造をもつ他界観のなかでも、あの世が下部に描かれることは、きわめて少なかった。まして、地下他界や黄泉の国のイメージは、ほとんど見られなかった。

あの世はひとつなのか、複数なのかを調べると、あの世は単数であり、上と下に分けられたり分化した世界ではなかった。極楽と地獄に分かれることはなく、この世の生き方や死に方で、死後の行く先が良い所と悪い所に分かれるという応報的な世界観はほとんど描かれなかった。

ただし、あの世が上下に分かれていないことは、必ずしもあの世の人々の居場所がひとつに定まっていることを意味しない。例6のように、あの世の人々が靈魂のかたちで、天にも地上にも偏在しているという絵や、あの世の人々の居場所がひとつではないという絵はかなりみられた。この世の人が地面上にいるのに対し、あの世の人々の居場所は雲の上に限られるわけではなく空中であるから、自在に居場所が変えられる場合も多かった。

## 2 あの世はどんな所か

### 2-1 この世の反映としてのあの世

イメージ画のなかでは、あの世はどのような性質をもち、どのような人たちがおり、その人たちは何をしていると表象されたのだろうか。この問いは、反転して、この世がどのような所と認知されているかをも明らかにする。はじめに、この世とあの世が関係概念であると述べたように、あの世という鏡によって、この世のありようが逆照射されるからである。

### 2-2 あの世は楽園か

あの世は、天にあり雲の上に位置づけられることが多かった。また、あの世はこの世よりも、肯定的な感情評価で描かれることが多く、花や太陽などにあふれた「自然の楽園」のイメージを伴っていた。また、あの世の人は恐怖や畏避の対象ではなく、この世の人を恨むなど否定的にかかわることもなく、肯定的にイメージされていた。

これは極楽浄土のイメージと同じなのだろうか。よく似ているようだが、その違いには注意しなければならない。まず、雲の上の人は描かれても、仏教画の来迎図などのような天女のいる風景は描かれなかった。あの世の人は、この世の人とほとんど同じ人間であり、衣服や身体のわずかな差異で区別されていた。光輪や天使の羽が付加された人間が多く描かれたことから考えると、この天上他界は、極楽というよりはキリスト教の天国のイメージの変形かもしれない。しかし、最後の審判や煉獄のイメージや超越神の存在はみられなかったので、キリスト教のなかでも天国と天使のイメージだけが選好的に取り入れられている。

また、「楽園」の実態は、花や太陽のある「自然」の風景のなかで、のんびり楽しく遊ぶというイメージであり、源信(985)が『往生要集』で描いた涅槃のように、この世を超越したこの世ならぬ美しく豪華で快楽にみちた世界としては描かれていなかった。

ここで描かれたあの世は、楽園といっても、この世では得られない特別の欲望がみたされる素晴らしい快楽の世界というよりも、近代的な事物が何もないごくふつうの自然の風景にすぎなかった。それは、この世が人工世界であり、あくせくした時間の流れで生きる世界であるのと対照的に、ゆったりした自然世界であった。したがって、極楽浄土というより桃源郷のイメージのほうが近い。それよりも「原郷」「原風景」「心のふるさと」のほうが、さらにふさわしい。折口信夫のことばで言えば、「<sup>はら</sup>妣の国」ということになるだろう。沖繩採訪以前の折口は、のちには結びつく二つの異郷意識を対比させていた(西村 1988)。一つは、本つ国を回顧するノスタルジイとしての「妣の国」、二つめは、気候がよくて豊かな住みよい未知の国を憧憬するエキゾチズムとしての「常世」である。ここで描かれたあの世は、常世というよりは、「妣の国」のほうに、より近いといえよう。

以上のように考えると、大学生の描いた絵には、基本的には極楽も地獄もなかったということになる。強い憧憬世界もなければ、強く回避したい恐怖の世界もないわけである。ただし、両極の世界がないからといって、彼らが現世を積極的に肯定しているわけでもない。この世とあの世が関係づけられるときには、あの世のほうが肯定的にとらえられ、この世は否定的か中性とみなされており、この世が肯定されることも少なかったからである。

あの世は愛憎両極をもつ両義的世界でもなく、この世も積極的に肯定されるわけでもなく、いわば、全体にクールでうす味の「この世とあの世」が表現されたといえよう。これは、満ち足りた現世に生きている現代の若者のもつ時代的特徴なのだろうか、それとも、過去に仏教など世界宗教によって表象されてきた世界観があまりに誇張されすぎていたのだろうか。さらに検討が必要であるが、後者の可能性も捨てきれない。後に論じるように、ここで描かれた絵と臨死体験との共通性の高さや、ある種の楽天的な「健康さ」にも注目すべきであろう。

### 2-3 あの世の人が見守るということ

特に多かったのは、雲の上にいるあの世の人がこの世の人を見ている、見守っているというイメージであった。あの世の人々は超越的な存在というよりも、先に死んだ親しい人々であり、「この世の人々を守る祖霊」のイメージに近いのかもしれない。

柳田の祖霊論の下敷きになったといわれる平田篤胤は、古東哲明(1994)の紹介によれば、次のように述べている。ひとが死後おもむくところ(他界)は、黄泉国でも天空かなたでもない。この国土は、顕明界(うつし世)と幽冥界(かくり世)とに二分されるが、国土においては一である。肉体は亡骸となって顕明界にとどまるが、靈魂は幽冥界へ行く。他界からはこの世の光景がつぶさにみえるが、この世のがわからは他界をみるができない。

この説は有名ではなく、イメージ画を描いた学生が平田の説を知っているとは考えられないが、イメージ画と符合している部分が多いことは興味深い。

なお、後ろや上から、母が私を見守るという構図は、母子関係のイメージ画にもあらわれる基本構図である(やまだ 1988)。また、「他界の母が私を見守るまなざし」は、日本に限らずアメリカの学生においても繰り返しイメージ画に現れる(やまだ 1997)。

人が相手を育むときに、相手と適切な距離をもちつつ、「何もしないでいいよ、でも、私を見てね」というかわりには、もっとも重要な教育的機能のひとつだと考えられる。このような関わりを、私たちは、あの世の人々に期待しているということであろう。

### 2-4 あの世のイメージと他界観および臨死体験との共通性

言語による他界観質問の結果では、全体の6割以上が他界の存在を信じていたことは驚きである。このような高率は、同種の調査(NHK放送世論調査所, 1984)でも見られており、これが現代の若者の宗教回帰と関係があるかどうかは今後の検討課題である。

イメージ画と他界観項目との関連を見ると、他界の存在を信じるか否かにかかわらず、イメージ画は描けるし、絵の質に違いがないことが確認された。ここで検討してきた絵は、他界を信じる人のみの偏ったものではなく、信じていない人でも同様のイメージをもつということである。

いずれにしても全体にステレオタイプといえるほど、よく似た絵が描かれることがわかった。



マスコミなどでつくられた既成のイメージが影響している疑いも否定できないが、もし、そうだとすると、既知のイメージのすべてが絵になって現れるわけではなく、きわだった選好がみられることが重要である。地獄や鬼や閻魔などは誰でも知っているのに、ほとんど出現しない。天国のイメージは多く現れるが、天使に限られ、よく絵画に描かれているキリストなど超越的存在はほとんど現れないし、最後の審判もない。

以上のイメージ画にみる「あの世」の特徴は、恐怖や地獄や審判がほとんどなく、幸福や安らぎの気分でみだされるという臨死体験の特徴とよく似ている（ベッカー 1992, 立花 1994）。細かいアイテムについては、日本の臨死体験では（立花の243人の報告から筆者が計算）、体外離脱（24.3%）、トンネル（22.2%）光（18.5%）、などよりも、人との出会い（63%）、花畑（42.2%）、境界（33.8%）が多く現れるが、その結果もよく似ている。

もちろん、ここで描かれた絵には、臨死体験の報道が影響を与えている可能性もあるが、それならば絵の表現の細部が似ているはずである。個々の絵の表現形がそのまま似ているのではなく、臨死体験者にはあまり現れない雲に「花」が組み合わされる、地獄がなく明るい、あの世の人が肯定的など、本質的なところで似ていることが重要である。臨死体験者が死後の世界を本当に見たのかどうかという議論は別にして、また、なぜそのようなイメージをもつのかの因果説明は別にして、人がもつ「あの世」の素朴なイメージには、共通性が大きいのではないかと考えられる。

以上、示してきたように、天上他界の場合も、地上他界の場合も、あの世は、この世とよく似た親しい世界であるという意味では連続世界であり、この世とのあいだに何らかの分離や境界があるという意味では区切られていた。その区別は、アベコベという逆転世界で描かれるよりも、同じ環境、同じ人間どうし、だが、わずかな差異の標識はあるという描かれ方であった。つまり、この世とあの世は、連続し類似しながら区切られているというのが、一般的な特徴であった。この世とあの世との断絶がより大きい場合には、肯定的にせよ否定的にせよ極端になり、あの世はこの世とかけ離れた超越的な聖なる場所になったり、逆に触れたくもないおぞましい禁忌の場所や恐怖の場所になるだろう。ここでは、そうではなく平凡で穏やかで親しいあの世、この世とよく似た場所としてのあの世が描かれていた。これを近傍他界観と解釈することは可能だろう。これは、また、民衆がいつの世にも素朴にもっているある種の楽天性の反映かもしれない。

#### 註

- 1) 第二著者の所属は、愛知淑徳大学。第二著者は「3本調査」から共同研究に参加し、その実施と結果のまとめの一部を分担した。本論文は第一著者の責任において執筆した。

#### 引用文献

- ベッカー, カール (1992) 『死の体験』法蔵館
- Bollnow, F. (1963) *Mensch und Raum*. W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart. (大塚恵一・池川健司・中村浩平訳 1978 『人間と空間』せりか書房)
- Geertz, C. (1973) *The interpretation of cultures*. Basic Books.
- Gregoire, F. (1956) *L'au-delà*. Presses Universitaires de France. (渡辺照宏訳 1992 『死後の世界』白水社)
- 源 信 (1985) 『往生要集 上下』岩波文庫

- 比嘉康雄 (1993) 『神々の原郷 久高島』上巻 第一書房
- 堀 一郎 (1951) 『民間信仰』岩波書店
- 金児暁嗣 (1987) 石切神社参詣者の宗教意識と宗教行動 塩原勉 (代表) 『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究 — 生駒宗教調査』(pp. 1-60) 昭和60・61年度科学研究費補助金研究成果報告書。
- 金児暁嗣 (1993) 日本人の民俗宗教性とその伝播 心理学評論, 第36巻第3号, 460-496.
- 金児暁嗣 (1995) 『来世信仰は死の不安を和らげるか?』科学研究費補助金(一般研究C) 研究成果報告書
- 加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子 (1984) 『日本文化のかくれた形』岩波書店
- 北山 忍 (1997) 文化心理学とは何か 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 『文化心理学：理論と実証』東大出版会
- 古東哲明 (1994) 他界のちかさ 久野昭 (編) 『日本人の他界観』国際日本文化研究センター 257-289.
- 中井久夫 (1984) (山中康裕編) 『風景構成法』岩崎学術出版社
- 西村 亨 (編) (1988) 『折口信夫事典』大修館書店
- NHK放送世論調査所 (編) (1984) 『日本人の宗教意識』日本放送出版協会
- 折口信夫 (原典1952, 1967) 民族史観における他界観念 『折口信夫全集16』中央公論社 309-366.
- Polanyi, M. (1966) *The tacit dimension*. Routledge & Kegan Paul (佐藤敬三訳 1980 『暗黙知の次元』紀伊国屋書店)
- 坂本 要 (1997) 他界と異郷・異界 赤田光男・小松和彦 (編) 『神と靈魂の民俗』雄山閣 205-215.
- 佐久間鼎 (1936) 『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- 立花 隆 (1994) 『臨死体験 (上・下)』文藝春秋社
- Tuan, Y. (1977) *Space and place*. University of Minnesota Press. (イーファー・トゥアン 1988 『空間の経験』筑摩書房)
- 塚本 学 (1994) 基層文化への関心とこの共同研究 『生命観 — とくにヒトと動物との区別認識についての研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第61集 1-9
- Tylor, E. B. (1871) *Primitive culture: researches into the development of mythology, philosophy, religion, art, and custom*. Routledge/Toemmes.
- 梅原 猛 (1989) 『日本人の「あの世」観』中央公論社
- 山田孝子 (1994) 『アイヌの世界観』講談社
- やまだようこ (1988) 『私をつつむ母なるもの』有斐閣
- やまだようこ (1998) いらない母のイメージと人生の物語 濱口恵俊 (編) 『世界のなかの日本型システム』新曜社 (印刷中)
- 柳田國男 (1946) 祖先の話 『定本 柳田國男集10』筑摩書房
- 柳田國男 (1948) 民間信仰 『定本 柳田國男集25』筑摩書房
- 柳瀬襄爾 (1966) 『他界観念の原始形態 — オセアニアを中心として —』京都大学東南アジア研究センター